
東方槐無夢

ジラート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方槐無夢

【NZコード】

N2043Y

【作者名】

ジラート

【あらすじ】

東方の永琳と夫婦喧嘩したかったからはじめた。

なお出るキャラ全て好意的に見られるのは個人的に非常にむず痒い
為、性格不一致による嫌悪・敵対関係などもありハーレムな展開はない・・・と思う。

まあそんなこんなで暇な方はどうぞ

1話 そして彼女は来た（前書き）

えーりん！かわいいよー！えーりん！

1話 そして彼女は来た

雪が降りそぞぐ曇下がり、俺は同じ職場の先輩に話を持ちかけた。

「ほつ、最近寒気が感じると?」

「ええ、いや風邪とか熱とかはないんですよ」

冬は本番であるが、むしろ秋から冬にかけての期間が一番風邪を引きやすい。

といつも冬本番になれば馬鹿をしない限り風邪など引くまい。

先輩は言葉を先回りされたのか小さく「ふむう」と呟いた。
普段から鋭い瞳をさらに引き絞り右手の人差し指で軽く唇を撫でている。

先輩独特の癖で何かを考えるとよくこのモーションをとるのだが、傍からみるとかなり怖い。

傍から見るとガンつけているように見えなくもない。

視線が異様に鋭い以外は完璧なのだ、顔のパーソンもいいし、性格も堅実で気配りできるタイプ。

が、その瞳の鋭さが災いして先輩が何か話すたび、皆背筋を伸ばし直立スタイルをとるのである。

・・・・・主任ですらそうなのだからもはや救いようがない。

そういう俺も最初はその目線にビビッて同時入社した同僚の中で一番腰が引けてたが、今では一番仲がいいのもその先輩である。

世の中わからんもんだ。

そんな先輩は俺の質問を程よく咀嚼したのかこちら田を向けた・・・
・・つもりなんだらうな、睨んでる様にしか見えないが。

「もしかして、アレか？」

ぬ、鋭い。

もうちゅうと話が一転二転するかと思ったが、いきなり確信をついてきた。

さすが先輩、無駄にハイスペック。

軽く目を見開いている俺に先輩はすっと目を細めた・・・「えーよ
そんな俺には目もくれず先輩は口を開いた。

「幽靈でもでたか？」

そうである。 そうなのである。

真に遺憾ではあるがこの俺には多少はあるが靈感といつのが存在する。

別に欲しくもなかつたが、母親の叔母にあたる人が昔靈媒師をして
いたそうな、胡散臭せえ。

そしてそれに血の流れを汲んで俺にもそういう才覚に目覚めたとい
いたいのだが、異能は女に強く受け継がれる性質を持つといつ。

まあ端的に言おう、要するに単純に勘が鋭い程度である。

幽靈もほぼ見えない、たまに視線の端に居るはずのない人影が歩い

てたり、視線を向けられて背筋が凍つたりその程度である。
むしろ妹のほうが血をよく受け継いでいる。

一人で買い物に行つた際、突然悲鳴を上げながら走り出す妹を俺は
呆然と見ている事しかできなかつた。

そんな事情をしる先輩がその結論に至つたのは別に不思議でもなん
でもない、先輩からしてみれば当然なのだろつ。
とはいへ、

「うあ、正解です。いきなり確信突きますかね」

「お前の悩み事なんてそれくらいしかないと思つてたけどな」

「うるせいいほつとけ！」

心の中で軽く突つ込みを入れ、仕事用の書類まとめる。
今日中にこれを済まさないと帰れない。

「俺にだつて色々悩み事くらいありますよ」

「で、いつ「」るそんなことがあつたんだ？」

「5日前くらいの事ですが・・・」

その日俺は田覚ましよりも先に田が覚めた。

(なんだ?)

最初に疑問を持ったのは不思議と冴えた頭と、氷水につかっただ後
のような寒気。

俺はこの感覚は知っている、幽霊が寝込みを襲つてきたのだから忘
れるという作業の方が難しい。

心臓は速く、体は熱く、意識は冷たく
瞳孔が開いた

初めて俺ははつきりとした形で幽霊を視た、視界の端に銀髪の女性
が探るような瞳でこちらを見つめていた。

「ここまで語つたのだが先輩の反応は相変わらずクレバーだった。

「ふーん、けど前に比べたらましだな」

そういう問題でもない気がするが、俺は話を今わせておく。

「前は完璧に寝込み襲われましたからね

「で?」

そこで先輩は話を切つてこちらに鋭い視線を投げつけた。

「それくらいじやないよな？お前はさつき『最近』といつたし、そもそもこの程度じや俺に相談すらもちこまないだろ？」

ええい、本当に鋭い。

先輩にとつて目の鋭さと物事の本質を見切る鋭さは同類項なのだろうか。

「そのとおりです。それからちょくちょく寒気がして・・・特に朝とかですねえ・・・」

朝夜の境界線。

幽靈とは精神体である。

そして精神体である以上、俺たちに物理的に干渉することは出来ず、精神での干渉が精一杯なのだ。

さらに言つとその精神干渉自体も、人が精神的にも肉体的にも健全であれば侵入することすらままならない。

せいぜい相手の精神と意識の狭間でしか干渉出来ず、仮に人が意識してみよつとすると靈体自体の精神が人の精神に弾かれ見えなくななる。

なら人が寝てたら無防備では？

と思うだろうが人は寝ると意識と精神が完全に自分という殻に閉じ

「こもり、情報の最適化を行うのである。
その間ほぼ全ての感覚シャットアウトするため、靈体に付け入る隙
を『『『え』』』」

「しかし・・・朝夜の境界線。覚醒と休眠の狭間、この瞬間こそ靈
体が人に干渉する唯一の時間」

「それ故に俺はこんなにも苦しまなければいけない。
こんなに苦しいのなら、こんなに辛いのなら・・・」

「靈力などいらぬ」

「そんな全身全靈をこめた俺の嘆きを先輩は面倒くさいついで眺めなが
らポツリと呟いた。

「で、どうすんだ?」

ゆがみねえ

「とりあえずお札とか張つてみますよ、うちの曾婆ちやんがアレだ
つたんでそれなりにコネ持つてるんで」

「そうかい、じゃあ一件落着だな」

「しかし嫌な予感しかしないです」

「勘か？」

「勘です」

「そりがじやあ当たるな」

うぼあー

デスクに突っ伏す俺を片目で捕らえつつ、先輩は自分の仕事に戻つていった。

目が覚める。

俺は布団を顔まで被りながら再びきつくれ目を閉じた。

覗いている。

誰かが。

布団越しに視線を感じる。

何か居る・・・

俺は札の効力の無力っぷりに歯噛みしつつ、口の中でもじもじと原稿用紙一枚分の文句を呟いて、絶望した。

(二)、怖い・・・

得体の知れない何かが俺を覗き込んでいるってだけでもうたまらない、勘弁してくれ。

人なら何とかなる、物理攻撃に物を言わせれば済む話だ。

(けび、靈体つてビうしたらいいの?)

俺は靈媒師でもなければ悟りを開いた僧でもない。

一応覚醒状態になれば干渉は早々受けないとわかつていても怖いものは怖い。

(布団からがばりと跳ね起きたら至近距離に怨み積もった女の顔・・・

・・無理だ!怖すぎる!現状維持!)

そういうて再び目蓋に力を入れるも状況はまったく好転しない。当然である、行動しなければ進展も後退もない。

(し、ししかたない、もつやけだ!1・2・3で飛び起きる、やるぞお!)

・・・3！

布団を力の限り跳ね飛ばし、視線があつた方向に目を移す。一気に肺に空気を送り込み、一息に氣力を練りこみ、一声により全てを吹き飛ばそうとした・・・・・・はずだった

「う・・・・・あ？」

そこには白銀の髪と赤と青を基調とした服を着た女性がたつていていた。

彼女の姿を見た瞬間言葉を失つた。

吸い込まれるように彼女の瞳を、顔を、全体を見て取つた。
心臓が高鳴つた、狂おしいほどの情熱で
頭が萎縮した、彼女以外の全てがどうでもよくなつて
そして、俺は彼女の声を聞いた。

（いた）

そういうつて彼女は姿を消した。

何を?
何が?
何で?

あらゆる疑問符が頭の中を渦巻いたが、それを思ひ自分の気持ちとはひどく客観的だった。

それほどまでに俺は彼女に心のあらゆるものを持たれた。

俺は何を考えるもなくベッドに突っ伏した。
ただただ体が休息を求めていた。

勘は当たつたのだろうか。それとも外れたのだろうか。

よくわからないまま俺の目蓋はそのまま落ち、同じく意識も落ちた。

「す、すこませんでした!」

そして俺はものの見事に遅刻した。我ながらあほ過ぎる。

直立角度45度の形で頭を下げる俺に先輩は方眉を上げた。

二人の間に微妙な沈黙が流れる。

最初に口を開いたのは先輩だった。

「昨日言つてたアレのせいか？」

びつや先輩は昨日のことはよく覚えていてくれたらしい。
ほんと細かいところまで気配りができる人だ。おそらくここで俺が
『アレのせい』と言でいいてしまえば先輩は事情を察して何かし
ら主任に一言言つてくれるだろう。

理解の深い先輩を俺は心底尊敬している。
しかし、だからこそ『』で甘えるのは俺が許せん。

「いえ、例えそうであつても俺が遅刻した事の理由にはなりません

先輩の瞳が鋭くなり、俺に不気味な威圧感を与えてくる。
それでも俺は視線をそらすことなく見続ける。
いや、今なら全てのものを恐れず見つめれるに違いない。
昨日の出来事は俺の何かを変えたのだった。

「せうか、じゃあ主任に謝つていい

そういうつて先輩は自分の仕事に戻つていつた、口元に苦笑のような笑みを貼り付けながら。

そうして俺は出会つた。
彼女に一世一代の恋を託した。

そして、彼女は来た

1話 そして彼女は来た（後書き）

どうも皆様、二次創作は初めてです。
それ以上に怖いです『特定しました^_^』って書かれたら・・・
オリならともかく一次は特定されたら死ぬ以外の選択肢が見当たら
ない

2話 なんじゅそりゅ？（前書き）

えーりんもつと出したい
早く幻想入りたいなあ

2話 なんじゃそりゃ？

仕事の中俺はずっと彼女のことを考えていた。

枕元にたつていた幽靈に恋している。

白銀の髪に透き通った黒瑪瑙のような瞳、体からあふれる氣はとても幽靈の様には見えず、生氣に包まれているようだった。

（もしや彼女は生靈ではないだろうか？）

落ち着いた今でこそそう思つがこればかりは本職でもない俺にはわからない。

しかしあそこまではつきりと幽靈を見たのは初めてだ。いつもは半透明な人影で、性別と年齢くらいしかわからなかつたからな。軽く背伸びをして腰を伸ばす。デスクワークは肩と腰に来る、後尻痛い。

（つまり彼女は覚醒中である人間の精神力に、進行出来るくらいの精神生命体であるということか）

ほんやり考える、いかに生靈でも覚醒状態の人には干渉なんて出来ない。

そもそも生きた人間に干渉できるモノ、例えば有名な心靈スポットなんかは多くの精神エネルギーの集合体である。

その不特定多数の精神体が冷やかしにやつてきた少数の馬鹿どもをいっせいに攻撃することにより、即効性の干渉が可能になる。逆にこれが数多の馬鹿どもになると精神体も手がつけられない。地

力から違うのだから数を揃われたらせいぜい意識の隙間をぬつて嫌がらせのゲリラ戦法しか通用しない。

しかし彼女は単体で米粒ほどの靈力しか持たない俺に対してとはいえて、干渉を行うことが出来た。

となると彼女に強い思念があるか、彼女自身にすさまじい靈力が宿つており、他者に介入することが出来るか。

(つてどんな呪術師だよ、前時代過ぎる)

そんな靈力とか精神力とか意味不明な謎エネルギーを頼るくらいならもつと他にすることあるだろつ。

コップを謎エネルギーで動かすのに50年修行して体現できたとしても、物理学的に鑑みると指先ひとつで体現できる。

阿呆臭い。幽靈なんてものに逐一氣を配る労力を費やすのなら、人間関係に費やしたほうがよっぽど健全的である。

結局出た結論は、生きた人間のほうがよっぽど厄介だ、といつーことだろつ。

アレは白痴夢と認定してさつさと忘れた方が得なのさ。

そういう聞かせて体から競り上がる憧憬の炎を無理やり鎮火させる。ちくせう、わかっている。俺はそんな幽靈に一目ぼれしてしまった。

頭を抱える。

俺、もしかして生氣吸われる?

そのとき俯いてウンウン唸つてゐる俺の首元に衝撃が走った。

痛い！と思う前に俺の意識が電源コードを抜いたテレビのよつたぶ

ついつと途切れる。

「起きる、食事の時間だ」

先輩そういうて彼にグラップラーばりの手刀を一撃見舞わせ一人肩で風を切りながら食堂へ向かっていった。
もっとも意識が完全にブラックアウトしている俺の耳には届かぬ台詞ではあつたが・・・

俺の働く会社には社員食堂なるものが存在する。

その日替わり定食は外で飯を食つより半額の値段で食べられると
いうことでそこそこ人気だ。

何故そこそこでしか人気がないのかといふと、

「うげえ今日も揚げ物かよ」

そう、食堂調理の手抜きなんかしないが圧倒的揚げ物の多さ。」つてりとしたものが多い。

その結果女性社員には不評で、よく弁当持参で屋上にたむらするのを見かける。

今は冬なのでどうか適当に場所見つけて食べてるんだひつナビ。

「どうあえずAセツア」

と、から揚げをチョイス。

「俺はBで」

対する先輩はカツ丼。

そういうて先輩は財布を取り出した、今日は先輩のおじりだ。手刀で意識を刈り取られ白皿を剥いた俺に対してもん飯を齧るだけ、といつのはふてえ野郎だが、仕方ない。俺は平和主義者なのさ。

トレイを片手に窓際の席は・・・残念埋まっている。
仕方ない、中央右よりの席を陣取りそこに座った。

「「いただきます」」

最初は味噌汁で口を濡らしから揚げに箸を伸ばす。

・・・うむ、うまい。

ただ揚げ物だけなのはいかがなものか？

「さつきは何を悩んでいたんだ？」

先輩が備え付けのお新香に手をつけながら聞いてきた。
どうやら頭を抱えて唸つている俺を不思議に思つていてるよつたな感じ
だった。

「俺が深く悩み」とてたらダメですか？」

そう思われるのも癪なので少しジト目で講義の声を上げた。
といいつつも俺の眼力程度では先輩をつらためせる事など到底出
来ない。

犬を相手にこらみ合つた方が成功率はよっぽど高いだろつ・・・
やらないが。

「ああ、お前結構即決タイプだったよな。お前がそんなに悩むのは
よほびだらつ？」

そんな事は・・・あるな。

なるほど、だからよく悩みが少ないとか言われるのか。

一人納得したもののどう説明したらいいものか、少し考える時間をもうつためコップに入った水を一息で飲みほす。

再びコップをトレイの上に置いたとき、腹を括って全てを打ち明けようと思った。

といつのも俺の体质を知っているのが先輩くらいなものだからである。

俺は今朝あつたことを全て話した。

幽霊がまたもや現れたこと

その幽霊が銀髪の美女だったということ

そしてその彼女に一眼ぼれをしてしまったということ

食堂で話す会話ではないなと思いながら、先輩に語った。
そして俺が忘れようとしても忘れられないということ。
それを先輩は訝しげな表情を浮かべることもなくまじめに聞いている。

なにこの人、かつこいい。

「呪われたんじゃないか?」

俺の話が終わつた後、いつものように口を触れながら俺が現時点思つていたことを実に分かりやすくいった。

そりや誰だつてやう思つ、俺だつてやう思つや。しかし・・・

「俺もそつま思つやこゐんですがね、ビツビツも

思つて現実化するなら世の中どんなに幸せだらうか。

世界はハーレムで包まれるだらう。

「不毛なことだとは分かつてはいるんですよ。幽靈に恋するなんて漫画の登場人物に恋するのとなんら変わりませんからね。いや、むしろバツドエンド用意されてる分だけ幽靈のほうがたちが悪いかもしませんね」

それでも・・・と俺は続ける。

あの時出来た気持ち、その思いは間違いなく俺の心から生まれたものだと信じてこる。

それだけは否定されたくない。俺はこの思いを大切にしたい。この一世一代の憧憬にも似た恋心を。

「で?・びつしたいんだ?」

先輩がそつ聞いてきて俺は少しあわてた。しまつた完全に自分の世界に入り込んでしまった。

さて「どうしたいか?」か・・・・・・どうしたいんだらうな、俺

バッドエンドしか用意されてない道を行くか行かざるか、つまりは
こいつの質問だ。

本来なら見えてる地雷を自ら踏みにいく必要はない。

「わかりません。 たども一度、会うだけでいい。 会いたい」

そしてそれが出来れば苦労はしない。

その地雷は見えているものの、その向こうには俺が求めてやまない
ものが存在する。

俺はその姿を歯軋りしながら見るしかないのだ。

だから最後に一日、そう区切りをつけたいのかも知れない。

二人の中で短くない沈黙が続く。

本当、食堂で何を話してるんだろう。

俺はこいつそりとため息を吐いた。

「お前シユーティング好きだったっつけ？」

と、先輩が突然話題を変えてきた。
なんだ？ いつたい何の話だ？

「いや、好きじゃないです」

残念ながら俺はシュー・ティングが大の苦手だ。

小学校のときギヤラガやツインビーなど、ファミコン特有の高難易度を最初にやつたばかりに俺の心をぼつきり折られた代物だ。

残念ながらいまでもそのトラウマが俺の中にはある。

そんな俺の返事を無視して先輩は執拗にシュー・ティングゲームを勧めた。

「東方Projectって知ってるか？」

「はあ、俺の中での東方はアジアだけですが」

若干引きながら俺は答える

「そうか、知らんのか」

だから何なんだよ。

とりあえず、先輩の話を聞いて三行で答えるなり。

- ・音楽がいい

- ・綺麗且つ優秀な弹幕ゲーム

- ・キャラもいい

の三點。とりあえずお前もやれ的な。

そうだった先輩は「アなシューティングゲームだったなあなんかまあ生き生きと『蜂』倒したとか言っていた・・・・蜂?

「シューディングゲームはいい。集中力がつくし、その瞬間だけだが何でも忘れられるぞ、色々な

そこまで言われて俺はようやく気がついた。

先輩は彼女とは別に、より興味を持つようなもの作つたらどうだ? と言つて来ているのだ。

まあそうであつたとしても

「シューディングだけは興味は持ちませんよ」

「前貸した神威どうした?」

「埃が友達」

「しね」

ま、先輩が俺を心配してくれるとわかつただけでも御の字か。とりあえずシューディングも前向きに検討しよう。ありがとうございます。

感謝の言葉を口に出すことなくかみ締めつつ、俺らはくだらない言い合いをしながら食堂を出て仕事場へと戻つていった。

その日の帰り、仕事が終わり今日は家で何食おうかなと思いを馳せていると

(ん? 部屋の電気がついている?)

アパートで一人暮らしをしている俺をいつも出迎えてくれるのは常に冷たい暗闇だった。

嫁かしればさぞかし楽だなーに、普段そう思っても一人の気楽を満喫していた俺ではあったが今日に限って部屋の電気がついていた。

(友達でも勝手に入ってきたのかな?もしくは電気を消し忘れたか)

・すでに部屋には先客が居た。

いや、それは選択肢のひとつにあった。

・その先客は女性だった。

俺の母親かもしれん、今は彼女いないしな。

・その先客は見ほれるような銀髪をしていた。

なんじやそりや？

そう、まさになんじやそりや。それ以外の感情が湧いて来なかつた。

今朝に見た女性の幽霊。

その彼女が今実体を持つて優雅にお茶なんぞ啜つていいのである。

陸地に打ち上げられた魚のよう口をパクパクさせている俺に彼女が振り返る。
視線がある。

二二二

笑いかけられた。

どばああん！－！－！

反射的に扉を閉めアパートの部屋の番号を確認する。
大丈夫だつている。間違つてるのは彼女のほうだ。
いや、それとも俺の頭がネジがなんか間違つていたとか？

状況を正しく認識できない。

意味不明な羅列記号が俺の頭を埋め尽くし過負荷をかけていく。
やめてくれ、俺の頭はそんなによくなーんだ！

傍から見たら気持ち悪いくらいに狼狽している俺の混乱をさらに一回りヒートアップさせたのは部屋の中に居る名も知らぬ美女だった。
先ほど蝶番が壊れてしまつほど激しく閉めた扉が開き、銀髪の美女
が顔を覗かせた。

一步後ずさる俺に彼女は声をかけた。

「入らないんですか？」

綺麗な声だった。聞いただけで背筋を伸ばしてしまつような。

『女教授』そんな言葉が俺の中に瞬いた。
もしかしながら『痘痕も笑窪』状態。彼女の行う全てが好意的に
感じる。

うおー静まれおれー

そしてその言葉に反応することが出来ずに呆然とする俺に彼女は言葉を続ける。

「立ち話もなんです。中で座つてお話をせんか？」

と、部屋に手招きする。

そこは俺の部屋・・・という突っ込みは脳内で完結し、俺は混乱の収まらぬまま血らの部屋に入つていった。

2話 なんじゅやつじゅ？（後書き）

やべえ

ばれるビジュンしか浮かばない
人知れずこつそりやうつ

3話 いい脚本家になれるぞ俺（前書き）

仕事の時間だからさつさと投稿、後主人公の名前決定
でもないほうがよかつたような気がする

えーりんマジ高嶺

こつからすこしづつ攻略していきます

『（相手が）攻略される』の方が好きな人はちょっとつらいかも
少なくとも永琳はがんばって落とします、他はしらね

3話 いい脚本家になれるか俺

家に唯一のテーブルになんともたまらない玉露の香りが漂う。かく言ひ俺の前に湯飲みがおいてあるのだが、俺は手をつけずに正座のままじっとその湯飲みを眺め続けていた。

家なのに何故正座？

とか

早く飲んでしまわないと香りが飛ぶ

とか

今はそんなこと//ソノノの生態系と同じくらごどりでもいい。そんなことよりこの家の家主よりゆつたりと寛いでいる女性のまつが問題だ。

いや、問題ではないんだよ。

むしろ俺が今日半日『こうなればいいなあ』とか思っていたことが現実になつた、実に喜ばしい。

だが考えて欲しい。

例えば一匹の犬が大空に思いを馳せていたとしよう。

その犬は鳥のように自由に飛びたかったのである。

しかしそんなことは犬には出来ないし、もつとこつと飛もないのにどうするの?と諦めていた。

そんなんある口、こつものように繩張りを練り歩き、一定間隔で生え

ている細長い石の塔にマークイングを施してい時、突然その犬の体から羽が生えて大空へと羽ばたいたのだ――

「どうよ？ その犬まともでいると思つか？」

俺は思わん。

突然の出来事にあわくつてキャンキャン吼えるか、飛び方も分からず自然落下するのが落ちだらう。

そして俺の状況はまさしくそれだ。

突然の出来事にあわくつてキヨロキヨロと拳動不審に視線を動かし、対応の仕方が分からず沈黙するのが精一杯。

とある小説の登場人物でキヨンという高校生が自ら宇宙人だと証する長門に対して「正直言おう。さっぱりわからない」と放った台詞は今俺にぴったりと当てはまる。

そういうえばシュチャーション的にあの状況とまったく一緒だな、実にめでたい。

こんな状況下に追い込まれた人間の最善策がすでに文章化していたなんて、心よりめでたい。

しかしリアルでやられるとこんなにテンパるとはな。キヨンお前すごいよ。

いやいや、状況をとにかく好転させないと、とりあえず教科書通りお茶飲んで褒めよう。それが一番だ。

そう思い湯飲みに手伸ばし、動きを止めた。

自分の部屋に違和感を感じたのだ。俺の部屋、こんなにきれいだつたか？

そう思つたとき彼女が声を上げた。

「ああ、『めんなさいね。』この部屋少し不衛生でしたから、掃除させていただきました。ものの配置は変えてないつもりですし、なんでしたら元の状態に戻すことも可能よ？」

あれ？俺まだ何もいってないよ？

「ふふ、不思議そうな顔ね。けどあなたの顔にかけてあるわよ？」

うん・・・うん？

あれ？これ俺が分かりやすいつて話なの？
それとも彼女の洞察力が異常つて話なの？

今度は俺の頭が幾何学模様で埋め尽くされる。若干『？』が多いのが『』愛嬌。

そんな俺をくすくす笑いながらすっと体の姿勢を整えた。
その仕草に俺は少なからずときめいた。さて、俺今日でなんじくら
いときめいただろう？

「では自己紹介からこきましょつか。私は永遠亭、蓬萊山輝夜に仕
える月の民『八意 永琳』と名乗つているわ」

そういうて柔らかい風が頬を撫でるようにふつと微笑んだ。
一瞬くらりときたが顔を引き締める。

「は、お・・・私は『槐 隆治』と申します」

そしてこれが彼女とのはじめての会話だと気づいたのは、もう少し時間要することになる。

いや、本当は外に晩飯を誘つたのだ。時間的にも彼女もそろそろ腹減る時間だし。

しかしそんな俺の提案を彼女は『のー』といった。

彼女いわく

「外の世界の食事に期待するべきところはない」

とのこと。俺らは某英国人か！

文句ひとつでも言つてやろうかと思つたら「だから自分で作る」と宣言した。

本来なら俺も付き添つて荷物をもち、お金も無論俺がはらうべきだ。そつ、たとえ彼女が少々奇抜な外観センスを持つていたとしても。

しかしそんな情けない事に俺はとにかく時間が欲しかつた。彼女『ハ意さん』からもらつた情報を整理する時間が。

彼女との自己紹介したとき、正直彼女の話の内容はまったく分からなかつた。

永遠亭？

定食屋さんか何か？

蓬莱山輝夜？

どつかで聞いたことあるなあ

月の民？

意味不

分かつたのは彼女が『ハ意 永琳』といつことだけだつた。
そんな俺に対しても彼女は一つ一つ丁寧に教えていった。

いわく永遠亭とは蓬萊山輝夜と呼ばれる姫が居を構える場所で、普段は病院として一般に開放されている。
そして月の民とは遠い古の時代に地上の穢れを恐れて月に移民したものとの事を指すといつ。

彼女が言つてゐる事を全て鵜呑みにするのなら、月から降りてきた宇宙人という事になる。
やべえ、さつきのショミーレーションは設定すらも合つていたといつことか。
事実は小説より奇なりだなあ。

と、ここで自分の身に起つてゐることがひどく他人事のように感じたのだ。
正直に言つて醒めたといつても過言ではない。
だつてそだらう。あまりにも話がとつぴ過ぎる。
自分のことを月から来た宇宙人となつたなら、それなりの証拠とやらを提示してくれなければそつそつ信じよつとは思わない。

「ハ意さん、そこまで説明していくださつてありがたいのですが、生憎・・・私は永遠亭や蓬萊山輝夜姫。ましてや月に人が住んでいたことは全く聞いたことも見たこともありませんが」

といつわけで俺も少し探しを入れてみることにした。

「う言われば彼女も何かしら情報を提示してくるだらう。彼女はいつたい何のために俺の前に現れたのか、それば今のといつわからぬ。」

最初の出会いがあんな形だし、堅気ではなさうだし、なによりいきなり俺の部屋に入り込んで『種族：月の民』を真顔で言う人物である。

・・・正直ドツキリつて言われたほうが安心する様な展開だ。

収まらない混乱をよそに彼女は少し疑問に思つたよつに言葉を繋いだ。

「『幻想郷』といつのは知らぬのかしら」

「『げんそうきょう』ですか。いや、お・・・私の辞書にはそんな言葉ありませんが」

「あら、やうなの？それなりに有名になつてゐて聞いたんだけど」

「はあ？有名、なんですか？」

「いいえ、じつちの話よ。そつね・・・では続けて話をしまじょつか」

そういうて彼女は右手を豊満な胸の位置にまでもつてこき、掌を上に向けると

「つー？」

思わずのぞけると、同時に理解した。

何故生靈姿の彼女がこの俺にも目視することができたのかを。

彼女の掌には高純度の靈力が塊となつて浮いていた。

俺が50年の歳月をかけても到達しきれないと思っていた物の完成形が目の前にあつた。

「これはそちらにも多少馴染みがあるでしょう

彼女はさも当たり前のようになついた。

確かに俺には多少だが靈力が存在するが馴染みあるかと言われば「そんなのある分けない！」といつてやりたかった。

しかしそれ以上に、俺は今ある現実を受けとめるのに精一杯だった。そんな俺の沈黙を彼女は肯定ととり、話を続ける。

「私の現状の居場所は『幻想郷』と呼ばれるところに存在する。そこは人々が忘却の彼方へ追いやつた様々な物の終着点。時には妖が、時には神が、そして時には人すらも。幻想と化した全てのものを受け入れる郷。忘れ去られた存在や技術が支配する魔境よ」

彼女は手に平にある靈力の塊の消し再び言葉を紡ぐ。

「そして私はあなた、槐 隆治を幻想郷へ誘いに来た」

そういうて、彼女は先ほど靈力を消した手をこじらに差し出した。
それは母親が小さな子を正しく教え導く手のようだ
それは嘆きの亡靈が黄泉へと引き摺る手のようだ
それはこじらを誘い込むように差し出した

「あなたの答えを聞きたいわ」

俺は反射的に彼女の手をとりたかった。
感情の赴くまま、先のことなど考えず、己の欲望に忠実に行動した
かった。

しかし俺の理性がそれをどぎめ、その疑問を口にした。

「…………何故、俺なんですか？」

訳がわからない。

確かに俺は靈力を持つていてる時点で他の人よりは違つのだろう。
しかしそれでも俺が選ばれる理由ではない。

となると本職に靈媒師をやつていてる人なんかどうだつて話にもなる
し、徳の高そうな坊さんとかいの一番に呼ばれるべきだ。

俺の疑問に彼女は俺を覗き込むように見て、

「私の遠い昔の縁よ。そしてあなたはその血筋。あなたの魂、靈力、そして遺伝子構造にいたるまで、その類似点が多すぎるわ」

しかしそれは俺以外のものを見るよつて彼女は答えた。

「そして私はあなたの影を追つていこまできたの。納得できたかしら?」

ああ、納得したとも。

それと同時にひどく失望した。

そう彼女は目の前に居る『俺』には目を向けず、名も知れぬ奴の影を俺に合わせてみていただけだったのだ。

そりやそりや、そうじゃなきゃ彼女ほどの人が俺になんて手を差し伸べてくれるはずなんてないのさ。

なんだ、なんだ。かつこ悪いな俺。

勝手に一人で舞い上がって、勝手に一人で落ち込んで、情けない。

思わずため息が出た。

「どうかしら、そろそろ答えが出た『クー』で……？」

と同時にお腹がなつた。

そういうえば緊張で色々忘れかけてたが、そうだ。俺は帰りながら晩飯の献立を考えるほどにお腹がすいてたのだ。

「 「 「 「 「 「

・・・ベタだ、気持ちがいいくらいベタ過ぎる。いい脚本家になれるぞ俺。

先ほどのブルーな気分がふつとび変わりにきたのがレッド。ハイテンションな主人公のように俺の顔を真っ赤に染めた。なんとも言われぬ沈黙が場を支配したが、それはふつらとした笑い声が遮った。

上目遣いで彼女を覗くとクスクスと実に上品に笑っている。

うつ、かわいい。

なんだらう？ギヤップ萌えというやつだらうか。

スラリとした性格をした彼女が口口口口笑うとはそれだけで破壊力がすさまじい。

俺は氣恥ずかしさと照れを誤魔化すために、破れかぶれに彼女を晩御飯に誘つたのだった。

そして冒頭に戻る。
さて、話をまとめようか。

彼女が言つていた幻想郷とは

- ・忘れ去られた人・神・妖が行き着く場所
- ・今はなき技術や存在がある場所
- ・なんか魔境

・・・・・あれ？これ黄泉の国じゃね？
俺？死んじやうの？

忘れられたら逝っちゃうつて・・・死ぬ以外のこと想像つかないん
だけど。

とりあえずこれは保留だな。分からぬことが多いすぎる。

次に月の民。

月は確かアポロ11号だったかなんだかが月面に旗をさしたらしい
のだが、その歴史的偉業は真実か虚言かで二つに分かれている。
月面着陸した映像は偽者だったとか、月面に到達した彼らを待ち受
けていたのは月に潜む宇宙人だ、とか。

あながち嘘とは言い切れないものがある。

確かに人類は宇宙望遠鏡や人工衛星で広い宇宙を知ることが出来た
が、それでももし宇宙人とやらが存在するのならその技術力はまだ
まだ拙いのだろう。

(それに、実際俺が見たわけでもないしな)

本質的に俺は自分の目で見たもの信用する。

他人の話した説明や映像はその人の主観が入るため、どうしても何からのフィルターを通してでしか見ることが出来ない。

(突飛であるのは否定できないが、突飛すぎて逆に信憑性があるよな)

どこの世界に自分は宇宙人だ真顔でいつ人物がいるのであろうか。すくなくともこの日本ではそんなこという馬鹿は鉄格子のついた病棟の一角で体育座りしたことだらう。

がちゃり

そう思つたとき彼女が帰つてきた。

「今戻つたわ、さあ今日はお鍋にしましょうか」

なるほど、もし今嫁が出来たらこんな風な生活が可能といつことか。素晴らしい、実に素晴らしいぞ！

しかし、なんとも早かつたな。

俺の家から一番近い場所にあるスーパーといえども結構時間がかかるのに。

飛んでも来たのかといづくらに早かつた。

しかしそんな疑問は彼女の作る鍋料理の前にはあまりに矮小、俺は彼女の鍋に思いを馳せた。

ちなみに魚介鍋だった。

幻想郷では珍しいらしい、そんなもんか？

味は・・・京の祇園に出されても違和感がないどころか、板前が土下座して「弟子にしてください」といつても俺は全然不思議には思わない程うまかった。

なるほど、悔しいがこれならば「外の世界の食事に期待するべきところはない」と言われてもしかたないだろうね。

その間何度も答えば出たかとか言われたが話は保留にしておいた。
俺はまだ彼女の話を全て信用したのではない。
勿論別に鍋を食べるのに夢中だった訳ではない、あしからず。

3話 いい脚本家になれるか俺（後書き）

お気に入りをしてくださった皆さんへありがとうございます！

1話投稿してお気に入り登録のないすぐさま黒歴史へ葬り去るところでした

おかげさまで逃げ場を失いました、うま

でもお気に入り登録してくれるとは『くわしい』です
やる気あがりますよね！

みんなあとがきで「感想よろー！」とかいうの『くわしく』分かります
私ももうつたらさぞかしつれしいでしょうね
でも同時に『くわしい』あがりますよね

うれしいと感じると同時に悲しみを背負うなんて役得ですよね！

4話 おかしいな、話が噛み合わない（前書き）

実を『いつ』とタイトル適当に決めました。
『じふり』と適当かと『いつ』と

『東方槐無夢』

『いつ』読みますか？

はい、俺も読みません。
今のところ『かいふむ』ってよんでも

4話 おかしいな、話が噛み合わない

「うぐう……」

「うぐう……」

外が騒がしい、早朝騒がしいのはズメだけにしてくれ。

選挙活動もこんな住宅街なんかより大通り出た方がいいんじやない?
そもそも車から選挙活動つて何様?市民の事考えるのなら地に足つ
けて俺らの視点から物を言え馬鹿者。

カーペットの上を転がり毛布を被りなおすも、体の節々が痛い。
やはり布団が欲しい、カーペット越しとはいへ直接寝るのはつらい
なあ。

つーか今何時?

んー8時30かあ

・・・・・・・・・・・・・・

「はつー?」

がばりと跳ね起きる。

こんなに悠長に寝ている時間じゃない!

クラリと軽く目が覚む。低血圧はこれが辛い、頭に血が足りない。目の前を霧が張った様に白く覚む、しかしそれは一時的なもので10秒も待てば次第にそれも晴れていいく。

早く仕事に・・・・・つああ?

「そうだ、今田や休みだ」

なんてお約束をやつてしまつたんだろう。

俺は自分の失態を誤魔化す様に軽く頭をかいた。

すでに脳みそに血の通つて意識もはつきりしてきたので、再び毛布に包まるといつ選択肢は間違つてゐるだらう。

ふと窓の外に目を向ける、外はまだ少し騒がしい。

おそらく登校時間になつた学生が騒いでいるのだろう、朝っぱらから元気だね。

ボーッとまどろみの余韻を楽しんでいると、いい香りが鼻をくすぐる。

どうやら彼女は既に起きて朝食を作ってくれるようだ。

素晴らしい素晴らしい素晴らしい、これは実に素晴らしい素晴らしい

昨日魚介鍋を食べ終わった時、それを待ちわびたかのよつて彼女はこう切り出した。

「悪いけどあなたの答えを悠長に待っている時間はないの。期間は今日を含めて七日間、幻想郷に来るべきか来ざるべきかの答えをそれまでに出しておきなさい」

彼女は食べ終わった箸や皿をまとめながらやや厳しく言った。

それだけ重要事項なのだろう、彼女の目は俺を捉えて離さなかつた。とはいっても、一週間か・・・・・一週間、少なくないか？

「七日間ってずいぶんと即急ですね、その日数でないといけない理由もあるので？」

「ええ、幻想郷には管理者が存在して彼女が提示した日数がこの期間。これを過ぎる締め出されるわね。地力で帰るのは少しばかり面倒よ」

そういうつて彼女は洗い物をまとめて台所へ向かつた。

「今日残った鍋は明日の朝おじやにして食べましょ」 と彼女が片付けの作業をしながら提案する。

ああ、実に楽しみだ。俺はそう答えて「うう」と横になつた。

なるほど、そういう理由か。

しかし理解は出来たが俺は到底納得できない部分が存在した。

幻想郷という場所には管理者が存在し、その人物が忘れ去られた物や存在を選別するのなら、何故彼女は八意さんの行動を容認したのだろうか？

俺は別に孤高でもなければ差異者でもない。それなりに社会に溶け込み、それなりに身を置いてる。

そんな存在が忘れ去られた幻想の居場所に行くだつて？前提条件からして間違つてはいないだろうか？

それとも何か、俺が話したところで『太話として処理してしまひ気か？

くそ、『管理者』そんな存在がいなければ俺も疑問なんて持たなかつたことだろうに。

ガリガリと頭をかく。

しかも驚きなのが俺に一週間とは言え猶予を『与えている』ことだ。ただ彼女が何かしら駒を欲しがるだけなら簡単だ、攫えればいい。連れ去る場所は比喩でもなんでもなく、正しく忘れ去られた郷だ。絶対に見つかることのない場所だといえる。

俺がいたという証明も月日と共に剥離し、微分化していく、最後には消えるのだろう。今回の様に猶予を『与える』よりそっちの方がよほど機密性を高めている。

そうして俺もめでたく幻想と化す、めでたしめでたくなし。

しかし件の管理者は俺に猶予を与え、選択肢まで用意している。問答無用で攫うことと比べれば破格の待遇、いやもはやそんなレベルではない。これは変革といつていい。

幻想という郷の変革、異様にきな臭い。

さらにも言つならハ意さんが嘘を言つてゐる可能性。

俺をどこぞに身売りしてやるうと考へるなら實に都合がいい。

一週間という期間に自らの近辺を整理整頓してくれるのだ、後始末が実に楽だ。

厄介だ、非常に。

どう転んでも俺に厄介ごとしか降りかからない気がしない。
面倒なのか？ そうか、じゃあもつ答えが出てるんじゃないのか？ と
自問自答する。

もちろんだとも、断ればいい。簡単じゃあないか。

だが俺はかちやかちやと軽い音を立てて洗物をする彼女の横顔を見
つめる。

月光のように澄んだ白銀の長髪に、それを同化したかのように写る
白陶器のような肌。

すらりと美曲線を伸びる鼻先とふくらとした唇、そして彼女の瞳
は横顔から見ても吸い込まれそうに大きく、美しかった。

そうだと、厄介ごとが来るなんて彼女が来た時点で分かっている
し、それで納得出来るのなら俺もこんなに迷ってない。
ああくそ、この自問もいったい何回したことか。いい加減はつきり
しろ、いつもの俺じやないぞ、俺！

「ううう」と悶絶する。

満足に食べ終わつたばかりで膨れ上がつた胃は抗議の声はあげるも
全て無視する。あーうーどうするよ俺え・・・

と、そこではたりととても重要な事項に気づいた。

「そういうばへ意さんは期限来るまでどうなさるんですか？ 一旦幻
想某に戻るので？」

「いえ、その予定はないわね。一度手間だし面倒だもの。七口の間は適当にこの場にどざまるわ」

鍋で使つた皿を謎の技術で半瞬かけず汚れを消し飛ばしながら、彼女は淀みなく答えこちらに目を向けた。

「嫌なら私はどこか宿でも取るけど・・・」

全力で拒否した、それはもう体全体を使って。

そうして俺は同じ部屋で一夜を共にしたのだった。
俺が床のカーペット、ハ意さんは俺のベッドで。

別に何かしら如何わしいイベントはなかつた。
まあ当然ではある。

しかし今日から後六日間とはいへハ意さんと同居できるのだ。
鼻歌でも歌いたい気分だな。

と、その時俺の携帯電話がけたたましく鳴り響いた。

『刑部 先輩』

あれ？先輩からだ。

今日は先輩は仕事じゃなかつたつゝ？と疑問に思いながら携帯に手にとり通話ボタンを押した。

「はいもしもし、槐ですが」

『ああ、今起きたか？』

「いや、大丈夫です。それでなんすか、先輩今日仕事ですよね？」

『ああ、いや・・・そうだな』

先輩にしてはいやに歯切れの悪い言い方だつた。

今頃携帯片手に脣を撫でていることだろう、実に分かりやすいなあ手に取るようだ。

そんな上機嫌且つ余裕綽々な俺に先輩は突然冷水をぶつ掛けてきた。

『もしかするとだが、八意 永琳つて女性がお前のところに来なかつたか？』

・・・・・・・

数秒、俺の思考はショートした。

数々の疑問が振つて湧いてきて收拾がつかない。
いかん、だんまりはまずい！何か話さなければ！

俺は手当たり次第に湧いてくる疑問の一つを手に取り投げつけた。

しかし、その疑問は非常に全うでありながら、今言つてはいけない疑問ワースト一位だったと、後で気づいたのだった。

「なんで先輩が知つてんですかあ！――！」

その俺の叫びに先輩はため息と共に答えた、やはりお前か・・・と。疑問符が頭の周りをくるくる回っている俺に先輩はこういった。

「テレビでも見てみる、あーチャンネル8だ」

その言詞に迷わずトレーニングのコモドンに手を伸ばす。

そして見た。

今台所に立っているハ意さんが買い物袋を片手に、何も付けず大空へと飛んでいく映像をー。

先輩の事も忘れて大声で叫んだ。電話越しに何か叫んでいるが、もう知るか！

今の俺はこれ異常ないくらいに混乱している、といつも最近混乱してばかりだな俺は！

とにかく俺は混乱をどうにかして欲しかった
納得する理由が欲しかった
解決するべく答えが欲しかった

だから「」の混乱の大元凶である八意さんと駆け寄った。
今の俺にはそれしか考えられない。

「や、八意さん！て、てててれびー！」

声が異様に震えるが俺は一切気にかけない。

冷静な自分が「なに言葉を噛んでるいるんだ」と失笑する。
しかし今は気にかける事項がでか過ぎてもう何がなんだか分からない。

そんな小さなことには田が移らないのだ。
うおー

そんな俺を彼女は『』で答え、今しがた見ていたテレビの画像に
視線を移し、

「あれが?どうしたの?」

とおっしゃられた。わふー、くーるびゅーていー

「いや、どうしたも「うつしたも」何飛んでるんですかーつーか飛べたんですかー?」

あれ?おかしいな、話が噛み合わない。

そもそもおかしいのは彼女か?俺の方がおかしいのか?

俺ら人間は何にもなしに空を飛べたか?

・・・・・・・・・・・・うん飛べない。

じゃあ、おかしいのは彼女だ。そだそりに違いない。

「おかしいですよー。や「うつしたも」

再び部屋に俺の絶叫が響き渡つた。

「靈力で空を飛ぶのが普通ではないの?だつたらどうやつて地上の民は月へ到達出来たのかしら?」

「純粹科学力で宇宙へ昇つたんですよ。そもそも靈力なんてこゝでは稀有な代物なんです。俺ですら珍獸扱いされるんですから」

「え?そんなー地上の民は結局靈力と科学の融合がないまま成長したのー?・・・・なんて、原始的な」

まずそこからか、彼女はあまり俺たちが住む世界に興味なかつたのかもしない。

となるともし俺が幻想郷に行つたと仮定したら、あつちの常識に馴染めるのかという問題だ。

靈力で空を飛ぶ事が常識の世界だと考えると他にはどんなものが常識だらうか？

幽霊に絡まれて世間話するのが常識とか？

それとも死んだ人間が生き返るのが常識とか？

・・・どちらにせよ、あまりこちらの常識に捉われてはいけないな、まだ行くつて決まつてないけど。

その間、八意さんは驚きの声を上げた後「・・・そうか穢れが・・・・・」とか「・・・だからこれほど時間を・・・・」と呴いていたが、俺はふと別の懸案にぶつかつた。

何故先輩はピンポイントで彼女の名前を言い当てたのだらうか？ 部屋の隅に転がつた携帯を眺めながら俺はそう考えた。

八意さんと朝食を取つた後、俺はノートパソコンを開けてネット回線を繋げる。

ちなみに八意さんは俺の部屋においてある小説を手にとつて読んでいる。

速読というのだらうか、司馬某作の分厚い本で、一ページに細かい

文字が2行にわたって出来たものなのだが、ほんの10秒ほどで次から次へとめくつて行く。

いや、幻想郷ではこれが常識なのかも・・・と自分を納得させパソコンでニュース項目を開けた。

『スーパー・マーケットに飛来するする女性！？

市 のスーパー・マーケットで、夕飯の食材を求めてやつてきた主婦のなかに、空中を浮遊して来た女性が、買い物をして再び浮遊して帰宅するという事態が起きていたことが明らかになった。一部始終を撮影していた一人がウェブサイト上に掲載、そのコメントのなかで「空から降りてくる少女^{ショタ}を探すために空を見上げたことはあるが、実際に起きるとは想像もしていなかつた。幻想郷は幻じやないんだ！」と述べている。

19日午後6時15分ごろ、スーパー・マーケットのもつともピークに達した時、一切の飛行器具らしきものを持たず、買い物袋片手に東方Projectの登場人物の1人『八意 永琳』と思しき人物が、空中を文字通り滑空して訪れた。

その場に居た100名近くが絶句する中、八意 永琳と思しき人物は魚介類や葱、白菜などを買い込んで、再び夜の闇に消えていった。

東方Projectとは、同人サークル『上海アリス幻樂団』の作品群の総称であり、主にZUN氏一人が制作している「弾幕系シューイティング」を主軸としている。

ニコニコ動画という情報媒体を主軸に、巷でささやかながら急速に広まつたゲームの一つであり、八意 永琳と呼ばれるキャラクターはそのシリーズの一つに登場するボスの内の人である。

何故この場所に現れたかは、完全に不明となつており、製作者のZ

じくも口を噤んでいた。』

東方Project・・・
シユーティング好きの先輩がやたら押していたゲームだったか、なるほど道理でばれる訳だ。

昨日に見た幽霊の話を逐一先輩に報告したからばかりつだったからな、もしかしたら先輩はハ意さんのことを持つて進めたのかも・・・いやそういう、あの先輩だからな。

試しに幻想郷で調べてみたらWikiが頻繁に更新されるほどに知名度は高いらしい。

調べてみると、なるほど・・・わからん。

冥界、妖精、吸血鬼に閻魔。

確かにそれは幻想だろう、昔の文献に載っているだけで今の現代社会は居るとは真に受けないだろう。

ところが昔の話でも『いた』と真に受けれるやつなんて居ないだろう。

ちらりと外を見ると、相変わらず騒がしい。

後で改めて外を見たら、騒がしいのは登校中の学生ではなく、多くのいい大人がカメラやビデオを片手に、犬のように走り回っているのだった。

中にはプロも混じっているのだから笑えない。

『ついアンテナつけたワゴンが牛歩のスピードで走っていて、しかも中の人間は全てのものが不自然に見えるのか、一箇所に視線を写すということをしない。

確かにここは住宅街で車の往来はほぼないが、一言やめてくれといいたい。

俺はため息を一つもらしてパソコンの電源を切った。

調べた所、幻想郷の管理者は『八雲 紫』という妖怪らしい。

妖怪つて・・・なんだよ、とも思つたがそういうものなんだから仕方ないんだろう、俺にはさっぱり理解できないが。

俺は『』ろんと横になる・・・あれ?頭に枕が置いてある、こんなところに置いたつけ?

ちらりと八意さんに目を向ける。

目が合つた。

笑いかけられた。

視線を外した。

ゴホンッ!

この八雲はいつたい八意さんをどうするつもりだらうか?

たしかに八意さんは大きく行動をとつてその存在を世に知らしめた。それは幻想郷の理に反するはず、だがその一方で東方Projectという幻想郷ほぼ同系列の話を容認している。

つまりこれは同列とは言え本質が違うため放置したか、もしくはその行為そのものが幻想郷に利する事ゆえに容認したかのどちらかか。

前者だつた場合どうなるか?

本質は違えどその根本にあるのは『秘匿』だ。

『これほどしか情報の相違が激しいのなら大丈夫』というの逆に

言うと『一部分とはいえ相違が合致したら拙い』といふことにならないか？

そうなるとハ意さんは非常に苦しい立場になる。相違が激しかろうと、類似するものがあり、それを証明する存在があるなら幻想は幻想でなくなる。

つまり幻想郷の崩壊、それを管理者が許す？許さないだろう。いや、それ以前に何とかしてこの状況下に火消し行為を行うはずだ。俺ならそうだな、さつさとハ意さんを始末して情報の風化を待つのがベターだろう。

昔妖怪が本当に存在していたのなら、今の現状を鑑みたら分かる。彼らはいつぞや存在しないものとして扱われたのだからな。

では後者ならどうか？

東方Projectという同系列の話が広がって幻想郷が得することとは一体なんだ？

もっとも可能性が高いのは神や妖怪の為に行われているという事だろ？。

神や妖怪は人々の信仰なくして存在できないと書かれていた。

神は畏怖や尊敬を糧に、妖怪は恐怖や憎悪を糧に。

人に想われるというのはそれほど重く大切なものなのだ。

人に慕われ神になる、釈迦やキリストの様に。
人に疎まれて妖魔に落ちる、吸血鬼や鬼の様に。

そしてこの東方Projectはそれらの想いを增幅するための神輿として使われたのでは？

そこまで考えて俺は軽く頭をかいだ。

確かに東方Projectは幻想郷の謎を紐解く優秀な資料だが、

あくまでこれはゲームであり現実ではない。

恐らく前者としても後者としても肝心な部分は隠されている可能性の方が高い。

それなら・・・と俺は視線を八意さんに向けた。

（直接聞こうじゃないか、なんせ彼女はデジタルな情報体ではなく、現実に存在する人物だからな）

そして俺と八意さんは、その日一日を幻想郷の話に終始した。

とこりで明日の仕事はどういう顔でいけばいいか、誰か教えてくれ。

4話 おかしいな、話が噛み合わない（後書き）

初めて感想もらいました、ひやつぼーい
p.t.がまたあがつたよーやつたねジワちゃんー

・・・・・

体内にばれたらバイツア・ダスト!
いいや限界だ!押すね!

5話 なんか腹立つてきた（前書き）

ようやく説明臭い文章からおわりばだー！
なによりえーりん書いて癒されるぜー！

5話 なんか腹立つてきた

カタカタカタ・・・・

「ハ意 永ー」「検索」

「何を検索しているのかしら?」

「ー?」

「あら? 私に興味をもってくれたの? うれしいわね・・・でも

カチカチカチ

「ハー」「検索」

「女の秘密に無断で覗くのはマナー違反だと思つわ」

「・・・・・はい、すいません」

結局八意さんって何なんだ？

「さあ・・・」

たつた一日休んだだけだが久しぶりに会社を見上げたような気がする。

5段ほど続く階段の向こうに2箇所ある自動ドアと、緊急事態が起きたら一番に心臓発作を起こしそうな老警備員が両脇を固めている。前から思っていたが、あの警備員何か意味があるのでどうか？人件費削減といつても、これはいかがなものか。

・・・・まあ皆文句は言わない。誰だつて地方に転勤なんてしたくないだろう。結局はしがないサラリーマンなのさ。

さて、それよりも当面の問題は

「まじ先輩になんて説明しよつ

苦虫を噛み潰したような渋い顔を作つて、氣力なく階段を上る。なんで俺あんな返答したんだろう・・・

しかも折り返しの電話も結局しなかつたしな、怒つてるだろつなあ。

頭をガシガシとかき乱す。いや、それだけならいいんだ別に、それだけなら俺もここまで悩みはしない。

先輩がいかに厳しいとはいえど、分別を持った立派な大人であり模範だ、話していい話と悪い話の区別はしつかりしている。早々に他言する)ことがない上に、謝つて事情を説明したら済む話である。

さすが先輩、かつていい。ただ田つきの悪さが残念。

しかし、

「おい、今度の休みに にいりばせ」

「なんだよ、あのコース興味あんのかよ」

「それもあるけど、田撃者情報募集してるらしいんだ。有用な情報だと金一封でるらしい」

「マジか！・・・いや、まあそつだよな。この現代社会で魔法が存在するかもって言つんだからなあ、聞いた話だとイギリスもその話にお熱なんだと」

「あそこはポッター発祥の地だからな。そういうファンタジー的なものに飢えてんだろ」

「はあー？・藤岡あのやつ、この時期に有給とりやがったのかよー！」

「『俺の嫁を迎えて行くんです！』つていつて人事にじり押してた

な。後で見たけど左遷リストにそいつの名前新しく入ってたよ」

「馬鹿じやねえの?」

「ちなみに俺も明日有給とった、嫁が俺を待つている」

「おい！」

だ。これだ。これなのだ。ビックリ歩いてもビックリ見てもその話題で持ちきりだ。

今朝のニュースで見た話だけど、昨日の晩ごはん、魔法を求める中学生が集団で学校を抜け出したんだと。やめろ、これ以上俺をネガティブな気分にさせるな。

インテリ学者最強の呪文『集団催眠説』にも期待したのだが、目撃者があまりにも多すぎてそいつらも肯定しだす始末、勘弁してくれ。もし俺が幻想郷とやらに誘われていることがばれたら？想像したく

先輩経由はほぼないと信じたい。それじゃなくとも誰かが『八
意さんが俺のマンションに入つていいくのを見た』なんて言い出した
ら・・・

「おせむじや二十九」

「おせむりじゅ二ヵ月」

俺は受け付け嬢に軽く挨拶をしてタイムカードを切りに関係者用の扉を開けた。

「うぐい、今日一日俺の胃腸に幸あらん」とを。

「…………」

「…………」

そして開幕一秒で諦めた。無理だ今日から俺は胃腸薬常用者決定だ。関係者用通路には鋭い瞳、なのだがあまりに鋭すぎてはや線になつてゐる先輩が壁にもたれ掛けり、俺の到着をまつていったようだつた。思わず背筋を伸ばすように仰け反り、一步引いてしまう。口元がなんかもう色々な感情が混ぜあわり、不気味に引き付く笑みを浮かべてしまつてゐる。

「…………よつ」

最初に口を開けたは先輩だつたが、俺は先輩の背後に雌伏す猛獸の影を幻想して返事することが出来ない。ひたすらに不気味な笑みを浮かべている俺をスルーしつつ、腕時計を確認しつつ口を開いた。

「タイムカードの時間、大丈夫か？」

その一言で俺は覚醒した。

まことに、一応余裕を持つて家を出たが周囲の話に元気をとりたれ、いつもより進行のペースが遅かつた。

「あ、はい。すいません押して来ますー。」

俺は慌ててタイムカードを切りに先輩の横を通り過ぎようとして、肩をつかまれ

「今日は購買で飯買って屋上で食つぞ」

と言つて肩を切つて自分の仕事場へと足を向かわせた。

一方俺は青い顔をしながら俯き加減に立ちつくすしかなかつた、もう既に胃が限界だ・・・

もうすぐ聖夜は近い。

女たちはその日に向けて自身を磨き、男どもはその日に向けてお金を貯める。

各社企業はビッグイベントに便乗して様々な企画を立ち上げ、少しでも多くの実績という名の金を欲している。

企業という組織から、社員という個人まで聖夜といつイベントに振り回されているのだ。

そして話題の中心は常に聖夜がその場所に居座つて、その毎年の現

象は変わらないと思つていた。

それが今変わつた。・・・いや正式に言つなれば昨日だらうか。街頭映像が飛空する女性を流し、画面が切り替わると魔法というものが存在するかしないかなんて、普段から考えればこいつら全員頭のネジが緩んではいると思えない議論を繰り返している。しかしそれを眺める遊歩道の歩行者はまじめな顔して、だといつに期待に満ち溢れた表情で街頭映像に目を向けている。

それはサラリーマン風の男性だつたり、子供を引き連れた一児の母だつたり、ジャンクフードを片手に歩く学生だつたり、中にはやや肥満型ともいえるリュックを提げた野郎共の集団は鼻息を荒くしていたりもしながらそれを見ている。

そしてそれは俺の働いている会社の中でも変わらない。

一昨日まで爪の手入れに勤しんでいた斜め前に座る2つ年上の笠原さんも、すり鉢といわれヒラの社員から忌み嫌われていた長山係長も、俺の隣座る同僚の上野も皆が皆、魔法の有無について協議を繰り返している。

その顔は初めてサンタクロースを見た子供のように、瞳を輝かせ、時には顔を紅潮させ語り合つてしているのだ。

その一方俺は顔を青くして頭を覆つていた。

(ぐうおおお、なんじゅーりゅあ！なんで嘘こんな事まじめに協議してるんだあー！)

俺が最初に思つた事は意外にみんな『東方Project』について知つてゐるということだ。

「えりに」言つながら隣に座る上野は「えーりん！えーりん！」とか「おま・・・その情報k w s k！」とかなんかよく分からん日本語を使つてゐる・・・k w s k？

いつも堅苦しいなまでに眞面目で無愛想な奴がこんな事言つてゐる。つーかお前はハ意さんの事好きなのか？

「ああ！？おいやつく聞けよ槐い。俺はなあ東方Projectも、えーりんも、咲夜さんも、超・大・好き・だあ　つー愛していふと言つてもいいこね！」

「あ、ああ。そつ・・・」

「つかー何？その『ハ意さん』つて？東方厨なら『えーりん』だろがあ！」

といいながら右手を全力で振り始めた。

何だこいつ。というか、いきなり人の名前を言つのか？本人の目の前で？許可もなく？

無理だ、俺は絶対に・・・そもそもこいつも本人目の前にしたらいきなり名前言うのだろ？

・・・・・・・・・・・・いじそつだ。なんか腹立つてきた。今度名前で呼んでいいか聞いてみよう。

「おいお前、仕事しろ」

その時、歪みないいつもの先輩が瞳を刃の様に鋭くさせて眉をにら

みつけた。

『・・・・・・・・・・』

まさに鶴の一聲だった。

和氣藹々とした仕事場が半瞬にして静まり、残つたのはカタカタと言つキーボードを叩く音だけが響き渡る。
まさに圧巻、下には強いすり鉢係長も一所懸命仕事をしている・・・
ふりだと思つ。

かく言つ俺も背筋を伸ばし氣を引き締めて仕事に入る。・・・・・
尻が痛い。

「槐、飯食うぞ」

誤魔化せないかとこつそり食堂へ向かおうとしていた俺を先輩が襟首を掴んで押しとじめた。
いや、まあ分かってはいたけど。俺はドナドナを脳内再生しつつ先輩に連れられ屋上へと向かつていった。

ある晴れた 曜さがり 屋上へ 続く道
先輩が ずるずる 俺を 引き摺りゆく
かわいい俺 引き摺られて行くよ
虚しいなひとみで 見て いるよ
ドナ ドナ ドナ ドナ 俺を 引っ張り
ドナ ドナ ドナ ドナ 俺の頭が ゆれる

「・・・はい」

「そろそろ自分で歩けよ」

5話 なんか腹立つてきた（後書き）

大量のタグを見ていいなあと思う

反面、永琳好きな人以外余分に来て欲しくないから現状で満足
さらに言うと俺の駄文が多くの人々に見られないから一安_s（_{ry}

という訳で仕事行くので短いです、では

6話 いじゅ、幻想郷へ（前書き）

先輩との会話は基本的に時間かかるなあ
そんなわけでいつもの2倍かかりました

6話 じゅう、幻想郷へ

屋上に出ると吐く息が白く色づき、本格的な冬の到来を感じさせる。聖夜までの後3日を数えるだけだが、今だ雪がむらついている。でも積もることはない。

もう少し北陸にいけば違つんだろうけど、そう思つながらホットの缶コーヒーを片手に身を竦ませた。

俺たち以外の人影は見えない、見えるはずもない。確かに暖房の効いた仕事場は少々頭がボーッとするものの、こんな寒空で昼食を食べる馬鹿は居わけないよね。

「 「 「 「 「

そんな馬鹿が今現在一人屋上で缶コーヒーとサンディッシュを片手に黄昏ている。

いやもつとも今から話す事は馬鹿みたいな場所だからこそ話せるものではあるが。

俺は「コーヒーを一口啜り口を開いた。

「先輩東方Project存知でしたよね」

まあ今話題にもなつてますけどね、と俺は続けた。

その間先輩は何か口を挟むことなどせず、かといつて急かすような雰囲気もせずビルの下を走る車の影に目をやつていた。

「もしかしてですが、俺の見た幽霊の人物がハ意さんに似ているつて想像ついてました?」

「まあな。長髪銀髪赤青服装なんて俺はハ意永琳くらいしかしらん」

その時先輩が始めて口を開き俺の話を肯定し、ペリペリとサンドイッチの袋を開封してぱくりと口に放り込んだ。

「しかしあ前から話を聞いたその日に、んなことあつたなんて想像すらつかなかつたよ」

「違ひないです、特に俺なんか元ネタしらなかつたからそいつが混乱したんですよ」

俺も先輩と同じくサンドイッチを開封して一口、シーザードレッシングを主軸にレタスとハムの香りがふわりと広がつた。定番ながらうまいなこいつは、個人的にはスライストマトも一切入れて欲しいが。

一時俺と先輩との間にものを咀嚼する音だけが響きわたつた。俺は口の中のサンドイッチをコーヒーで流し込み話を続けた。

「実はハ意さんに幻想郷へ来ないかと誘われまして」

この言葉に先輩は初めて反応らしい反応を見せた。缶コーヒーを傾

ける動作が一瞬とまり、再び動き出すという蚊がとまつた程度の小さな変化ではあつたが。
それに構わず俺は続ける。ここからが俺がもつとも話したい、相談してみたい事だつたからだ。

「後5日間までに俺はここに留まるか幻想郷へ行くかを決めなればならないんです。しかし……」

全て話そう。残念ながら俺は頭の回転はいいほうではない。自分で見たもの聞いたもの信用するというものの場合によりけり、時としてそれが逆に自分という視点のフィルターしか見てないと言うことになりかねない。

それは『独りよがり』ともいえる。たまに直接とかで「自分のことを客観的に見ることができます」なんていうのははつきり言おう、馬鹿だ・・・・・ そうだろう? 昔の俺よ。

「自分のこと」というのは置き換えれば自分しか見てないということになる。

本当に客觀性がある奴なら多くの人と情報を共有して、そしてそれを独自で纏め上げる技術をもつ。これこそが本当に客觀的視野で見ることが出来る人物。

だから今回唯一情報を共有している先輩に全てを話し情報の比較を図りたい、俺は聖徳太子や諸葛孔明ではないのだ。

正確な情報を整理するのならば他者情報との比較すれば容易く、さらに先輩は素晴らしいことに大人の良識と寛大さを兼ね備えつつ、先を見据える慧眼ももつてているパーフェクト超人。

俺なんかに及びもよらない決案を出してくれるだろ?。

「・・・といふ訳です。幻想郷は本来隠蔽し、幻想たるもの。しかし今回はどう考へてもおかしい。その上ではたして行つていいかどうか・・・」

皆『幻想郷が実在するかもしれない』といふ懸案に夢中になつて他のことには目を向けていない。

確かにもし俺が当事者ではなかつたらこんな事考える氣すら起きなかつた。

ただその他大勢に紛れて眞面目な顔で魔法の有無について話すのだろうか？

何故今まで表沙汰にされてなかつたものが何故今になつて露になつたなんて考えただろうか？

そして、映像にうつるハ意さんにはやはり心をときめかせていたのだろうか？

そこまで考へて俺は軽く首を振り、頭をかいた。

馬鹿らしい、今はユフについて考へる必要なんてない。

「・・・俺から言わせれば問題はそこではない」

そう答えた先輩に俺は視線を移す。

先輩はいつものモーションを取り、すっかり冷めたであろう「コーヒー」を一息で飲みきつた。

「問題は何故お前か、だ。そしてもう一つは、何故幻想郷を示唆する行動をとつたにも関わらずハ雲紫が動かないのか、もしかすると

だがこの事態を含めて既に決定事項なのかもしれん」

前者の疑問にはすぐ答えられる。俺の先祖に友好関係があつたらしくて、だつたか。

しかし後者は正直先輩がいつたい何をいつているのか分からなかつた。

「ちょ、どういうことですか！つまりハ雲紫という人物はハ意さんを利用してこんな自体を！？」

「さうかもしれんという話だ、さらに言つならば俺の知識にあるハ雲紫とハ意永琳が本物ならこんな初步的なミスはしないと思つ。設定は確か『妖怪の賢者』と『月の頭脳』頭が切れるとかいう次元の話じやない。その存在がこの事態を容認しているということは、この状況そのものが幻想郷に被るデメリットを差し引いても行わなければならぬ、その必要がある訳だ」

先輩はそう答え俺に向き直つた。

「それがどういったものなのか、情報が少なすぎる今は分からないが幻想郷がこのまま干渉を続けるようならば、お前が幻想郷へ行こうが行くまいがこの世界は変わっていくだろ？」

それはそうだろ？、この世の中は大きく変わるに違いない。

靈力とか魔力とかいう謎エネルギー、それは単純にこの現代社会が

もつとも危機感を募らしているエネルギー問題の解消の主軸として扱われる。

なんせ靈力とは、加工しだいで一切の飛行機器を持たずしてリアル空中散歩を可能にするのだ。

靈力1に対するエネルギー変換効率はどういうものかまで突き詰められるのであれば、ハ意さんが眩いでいた靈力と科学の融合が可能になるのではないだろうか。

そうなれば、全世界で新エネルギー革命が起ころう。この東方の島国を震源地として。

「お前にあるのは視点の違いだけ。幻想郷へ旅立ち俺たちの世界が変わることを傍観するか、ここに留まり変化という濁流に飲まれ流されるかはな」

先輩はそういうて俺に選択肢を投げかけた。
幻想郷へいくか、留まるかを・・・しかし、

「「」の変化に干渉するつていう選択肢はないんですか？」

俺がただ時代の流れに流される言い方が癪に障る、断固抗議だ。
しかし先輩は俺の抗議を面白そうに鼻で笑った。

「お前が、か？無理だな、到底敵わん。例えばもし、今年正月のK-1で魔裟斗悲願の復帰戦があつたとしてその挑戦者がゾウリムシ

だ。どちらが勝つと思つ? そう云ふノベルの話だ」

そこまでいうか！？ つーか俺ゾウリムシかよ！

その言葉に俺はふて腐れたようにそっぽを向いて、残りのサンディーッチを口の中に放り込んでコーヒーで流し込んだ。

先輩は俺を見ながら何か面白いのやつ一ヤ一ヤ笑っていたが
とため息を一つついて再び口を開いた。

「誇張でもなんでもない。本当にお前の間にはそれくらいの差がある。納得したいのであれば、お前が幻想郷へ行つて答えを見つけるんだな、案外八雲紫はこちらと幻想郷を繋ぐ外務官としての役割でお前の幻想郷入りを容認したのかもしれんしな」

先輩は空のコーヒーの缶を弄びながら、今俺がもつとも心が動くであらう言葉を言い放つた。

「それに、八意永琳のことがわすれらるのか？」

その言葉は反則だ、卑怯だ、意地悪だ
先輩の一言で心の聲が決まつてしま

先輩の一言でもう答えが決まってしまった。
たぶん、俺には面倒くさいことが巻き起こるのだな。

幻想郷と俺たちの世界を繋ぐパイプとして俺は使われるのだろうか？
それとも幻想郷宣伝の為のスピーカーとして俺は使われるのだろうか？
はたまたなんてことはない、ただの駒として俺は使われるのだろうか？

上等だ、やつてやろううじやないか。恐らくこのチャンスを逃したら次はない。

降りかかる火の粉を払いながらでも俺は進んで行ってやる。
たとえ八意さんは誰かの影を俺と重ね合わせてたとしても、それで構わない。

そもそも出会いとは、そんなものじやないか？

昔初恋の人に似ていたから、とか。

趣味が俺と同じだつただけ、とか。

最初はその程度でいい、問題はその過程。

俺はやる、やつてみせる。

彼女のそばに並び立つために、なんだつてやつてみせよつ。

もう迷いは消えた。いこい、幻想郷に

先輩は俺の表情を見ながらにやりと笑った。

「ま、がんばんな

「そりいえばハ意永琳は今何してるんだ？」

冷たくなった缶をゴミ箱に投げ込んで先輩は聞いてきた。
俺も続けてゴミ箱に向かって投げ込んで、外れた。
くそっ、と悪態をつきながらのろのろゴミ箱へ近づいて缶を拾い上げてその中にぶち込む。

「とりあえず目立たないようにしてくださいって釘さしてますので
家に籠つてるかと思いますが」

俺の返答に先輩は一瞬言葉を詰ませた。

不審に思つて振り返つて即後悔した。その鋭い瞳が俺の刺し貫いて
いるからだ・・・な、なんなんだ！？

先輩は俺を視線から外さず、外の凍えるような空氣にも負けないよ
うな声を上げた。

「家つて、お前のか?つてことは、泊つた、のか?」

一陣の風が屋上を撫ぜる。

俺が思わず身を震わせたのはその故だと信じたい。

ゆうくりと後ずさる俺に合わせるように先輩が歩みを進めていく。

「知ってるか？俺はな、13日の金曜日にジエイソンがくそつたれなカツプル共に正義の鉄槌を下すシーンが大好きなんだ」

「ちょ、ちょちょつと待つてください！ハ意さんとはそんな関係じゃないですって！そもそもハ意さんは俺の影を追つて……」

俺の引きつった声に先輩は意を解さず、すばやく踏み込んで俺の頭を驚掴みにした・・・いてえ！！

「能書きは垂れたか? じゃあクタバレ」

! !

刑部先輩 26 歳

スペック：S +

今まで付き合つた彼女：2人

付き合つた期間最長：3ヶ月

振られた理由：なんでいつも怒つてるの？ 怒つてない
モテない理由：目つき・よく不良に絡まるから

仕事帰り、家へと歩みを進める中、俺は思考の底を漂つていた。
なんせ幻想郷へ行くという決心はついたものの、やるべきことには止
済みだ。

まず会社は、まあ退職しなきゃ駄目だよな？
この時期このご時勢に退職か、いてえなあ・・・

ガリガリと頭をかいて今やらなきゃならない身の回りの整理に頭を
悩ませる。

とりあえず後五日間で全てのことに対する決着をつけなければならない。
まず

- ・会社の退職願
- ・アパートの明け渡し
- ・親に事情説明

これは確定だ。

会社の退職は色々引き継ぎとかあるし、つーか聖夜前のこの時期だし。

もしかしたら聖夜までは仕事はしないといけないかもなあ。
とりあえず辞職届は書いといて、次はアパートの明け渡し。

不動産屋に解約の連絡して手続き。

その後に荷物を出して、冷蔵庫とか洗濯機とかどうしよう。処分しようと思つたら以外に金かかるからな。

最後は親だな。

ま、俺の家は放任主義だからそれほど強くは言われまい。
むしろ女性のために全てをなげつた言つたら、逆に喜ばれそうだ。
変態だからなあ俺の家は。

後は貯金全てを家に渡したらいいだろつ。

後はそうだな、幻想郷に何を持つていこうかな？

電気通つてるのか？

電波は？水道は？

うーんネットで調べたいところだけど、八意さんが許してくれるかな。

そこで思考の渦から身をあげた。

いい香りがする。今日はなんだろ？…これは恐らく…・・・ビーフス
トロガノフ！と思う！
いいねえいいねえ最高だね！

俺は期待で膨張した心を胸に家の扉を空けた。

6話 いじり、幻想郷へ（後書き）

俺キモス

そういうえば最近気付いたけど感想もらつたくらいでは yottt 上がらないんですね

素晴らしい！素晴らしい！これは本当に素晴らしい！

これで心置きなく「感想くれ！」って言え m a s • • •

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2043y/>

東方槐無夢

2011年11月24日15時49分発行